

各駅停車・大分県歴史散歩

ふるさとの駅

(22) バス路線 地松浦、蒲江、尺間登山口、波寄

初版：2007年7月27日

⑩② バス路線 (26) 地松浦・梶寄

九州最東端の半島の町



●この電子ブック「ふるさとの駅」＝各駅停車・大分県歴史散歩は、昭和58(1983)年7月20日から翌年の1月28日までの約半年間、115回にわたり大分合同新聞に連載されたものです。25年後の今年、電子ブックとして復刻しました。

したがって記事中の「いま」や「現在」は25年前の状況を示しており、その後駅名の変更や路線の廃止などもありますが、当時を思い浮かべながらお読みいただきお楽しみください。

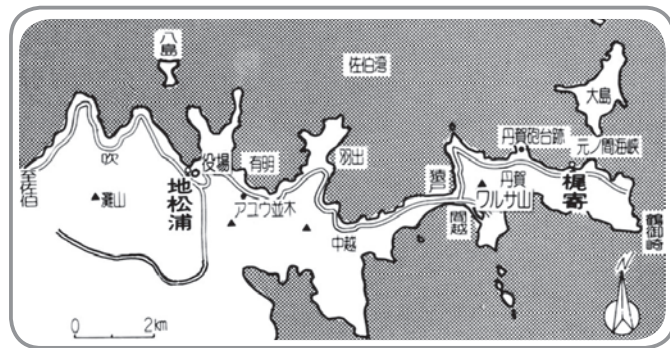
◀ 水産基地のある地松浦

■北岸に点在する浦

豊後水道に細長く延びる鶴見半島。リアスの海の特有の地形で、岬と浦が複雑に出入りし、急斜の山が海岸に迫る。半島の背骨は佐伯市との境の灘山からワルサ山にかけて連なる 200～350 メートル級の屋根。それが最も低くなる猿戸付近では標高 72 メートルまで落ち、半島も大きくくびれて南北の幅はわずかに 220 メートルにせばまる。

この連なる稜（りょう）線を境として北が鶴見町、南が米水津村となる。半島先端の鶴御崎には 200 メートルに達する断崖があり、ここから米水津村側はいたるところに絶壁が見られるが、鶴見町側ではところどころに平地があって、そこに浦と呼ばれる小集落が点在する。

其中最も平地の広いのが半島のつけねに近い地松浦、半島の先端に近いのが梶寄浦である。また梶寄の北には元ノ間海峡をへだてて大島がある。ともあれ鶴御崎は九州の最東端、梶寄や大島が集落の存在する東の端だろうか。ただ、これから北東 13 キロの水道のまっただなかに水ノ子島があり、これも鶴見町のうち。灯台があって、その管理職員が最東端の住人、か。



■先端まで通じた道路

細長い半島、複雑な海岸線、陰阻な地形。それは陸上交通にとっては全く条件が悪く、人々はもっぱら船によって往来した。陸には獣の通る程度の道しかなかったものだ。そうした状況は近代になっても続き、なんとか陸上に自動車の通れる道をつくろうという動きが本格化したのは戦後になってから。昭和 33（1958）年に佐伯から初めての道路が吹浦に入った。

だが、その後は急ピッチで道路が延ばされ、57（1982）年春についに梶寄まで開通、8 月にはバスの運行も始まった。連絡船は長い間の航海を中止し、人々の生活はめまぐるしく変わった。現在ではさらに、半島の背景である稜線に「スカイライン」の建設も進んでいる。また、道路と並行して地松浦に水

<メモ>

周囲にある名所旧跡等
 ◇佐伯駅前から地松浦 14.5 キロ、桑野浦 18 キロ、羽出浦 22 キロ、中越 14 キロ、猿戸 28 キロ（米水津村の間越海岸まで車道でさらに 1 キロ）
 ◇丹賀浦 31 キロ、梶寄浦 33 キロ（道路終点の下梶寄までさらに 1 キロ）。バスを利用しない場合、浦代峠経由だと地松浦が近くなる。

産基地の建設も行われ、56（1981）年9月には第1回全国豊魚祭の会場にもなった。海の町・鶴見は、水産と観光の新しい歩みを始めている。

■藩を支えた海産物

水産が古くから半島の主要産業だったことはいまでもないが、江戸時代は特に佐伯藩によって厳しく管理されていた。同藩では領内にたくさんある浦を北から順に上、中、下の三浦にわけて支配、鶴見町はその中浦に当たっている。

藩の石高は少なかったものの、海産物は豊か。そこからの運上が財政をうるおし「佐伯の殿さま浦でもつ」といわれたほどだから、藩が浦々の開発に力を入れたことがわかるだろう。例えば大島。一帯の水産資源に目をつけた初代藩主の毛利高政は元和元（1618）年、島の庄屋に年貢の永代免除を条件に開発奨励を命じ、同7（1624）年には島の特産アワビの献納を免じて人々が島に住みつくようにした。

こうした開発の一方では、浦々に対して乱獲をいましめ、資源保護にも力を入れたようだ。そのうえで、網税をはじめ各種の税を課し、がっちり吸い上

げたことはいうまでもない。

■丹賀砲台の悲劇

また、豊後水道に長く延び、佐伯湾の防波堤でもある半島は、海防の面からも重要なところ。藩では正徳6（1716）年、大島に浦手番所、遠見番所を設け、旅船改めや海難救助を行わせている。

軍事上の重要さは近代になっても変わらない。豊後水道の入り口に当たるため明治政府は日清・日露戦争のころから鶴御崎に望楼を置いていたが、昭和8（1933）年には丹賀浦に砲台を建設する。

この砲台は悲劇の場だった。同17（1942）年、第二次大戦が激しくなって一層重視されていたとき、試射のさいに爆発事故が発生、将兵10余人が爆死、砲台そのものも使用不能になったのだ。そこで軍では急きよ、鶴御崎に場所を移して新しい砲台を建設したが、完成後間もなく終戦となった。両砲台跡は、いまでもときおり訪れる人がいる。半島ではこのほか、有明浦の遊漁センター、アコウ並木、羽出浦の長曾我部の墓という五輪塔群、下梶寄に明治27（1894）年に建てられた水ノ子灯台官舎などが見ものである。N

⑩3 バス路線 (27) 浦代・宮野浦

養殖漁業とミカン



■水田のない村

豊後水道を東征したという神武天皇伝説が、この浦でも語られている。天皇の軍船がこの湾に入り、米と水を補給したという話で、米水津という名はこれに由来するとされる。

しかし現在、この海岸の村では、全く米を作らない。江戸時代にわずかながらも石高が記録され、一時は 67 石余の年貢米を納めているし、米がとれないわけではない。近代になっても稲作は続けられ、浦代浦や色利浦を中心に 10 ヘクタールほどの水田があった。それが戦後、急激に減り、昭和 42 (1967) 年以来皆無となっている。

水田に限らず、耕地そのものが少ないのだ。これは県南部のリアス海岸に共通するもので、かつては「イモとイワシ」という言葉もあった。陸では山腹の急斜面を開いてイモをつくり、海ではイワシを

とって生活していたというものである。その乏しい耕地に植えた作物をイノシシの害から守るため、米水津村と鶴見町の境となる山には高さ2メートルほどの「シシ垣」が延々と連なり、往年の村人の苦勞をしのばせる。

■豊漁だったイワシ

耕地は狭いが海は広く、そこではたくさんのイワシがとれた。イワシ漁は米水津漁業の中心で、特に江戸時代は干鰯（ほしか）で知られる。イワシを煮て油をしぼり、残りは干して肥料などに利用した。米水津だけではなかったが、これが佐伯藩の財源として吸収されていったものである。

とにかく、あの手この手で税をとったらしい。網税、干鰯浜税、同請負税、小漁税、鱗税などがあり、網税だけでも小引網税、大鰯網税、磯魚張網税など13種があったそうだ。

明治以降もイワシを中心とする漁業は変わらなかったが、漁法は多彩になったらしく、村の資料館にはさまざまな漁具がある。その中に、魚見のウチワ一対が保存されていた。米水津湾を見おろす沿岸

<メモ>

周囲にある名所旧跡等

◇佐伯駅から浦代浦 13.5 キロ、色利浦 18 キロ、宮野浦 20 キロ、竹野浦 16 キロ。

◇間越は鶴見町猿戸から。「地松浦・梶寄」の交通案内の項を参照していただきたい。なお、鶴卸トンネルで浦代から鶴見町への距離が短縮され、佐伯市から鶴見町へも便利になった。



のあちこちに魚見場（岡見物）があり、そこに長老が立って湾内の魚群を見、両手のウチワの振り方で漁船団を自在に動かして網を入れさせたものである。

■不振からの脱却

戦後、水田が急速に姿を消して行くのと並行して、沿岸漁業も次第に振るわなくなった。他の町村と同様に、人口が流出するようになった。一時は 4500

人近かったのに、最近では 3000 人前後にまで減った。出かせぎに行く人も多かった。そうした人のなかから塵（じん）肺患者も出て、社会問題になってきた。

こうした状態から立ち直るため、30 年代後半から 40 年代にかけて、陸と海で新しい産業が始められた。陸ではミカンの導入である。一時は耕地の 80% がミカンの木で埋められた。

海では養殖漁業が 35 年ごろから始められた。ハマチ・ブリを皮切りに、アジやタイなども育てられている。いわゆる、とる漁業からつくる漁業への転換である。

だが、ミカンも養殖も、沿岸各町村がこぞって取り組むとなると価格暴落などで行き詰まりが見られるようになった。新しく加工産業などが登場しているが、全般として村に試練は続いているといえるだろう。

■海にゆかりの魚鱗塔

海の村だけに、文化財にも海にゆかりのものが多い。浦代浦には天正 9（1581）年創建の養福寺があり、東の丘上に宋庵の普門院観音堂。海中から引

き揚げられたという木造十一面観音がまつられ、境内に文政 5（1822）年の魚鱗塔がある。竹野浦にも、それより 1 年古い魚鱗塔。

さらに宮野浦にはもっと古い享保 5（1720）年の魚鱗塔をもつ養福寺末の迎接庵があり、魚霊観音も安置される。

米水津村への道は、かつてウサギ道ぐらいの峠路しかなかったが、明治 43（1910）年に浦代峠のトンネルが開通して以来便利になり、昭和 44（1969）年の新トンネルでさらに改善された。ただ、同村の観光名所である鶴見半島南岸の間越海岸には村内からの道はなく、鶴見町を経なければならぬ。その鶴見への道は最近になってトンネルで結ばれた。

船を利用すれば、豪快な潮吹きや、自然林の沖黒島、地黒島などを見ることがもできる。

⑩4 バス路線 (28) 畑野浦・蒲江・波当津

日向灘に面する南の町



◀ 潮光る美しい蒲江湾

■改修された峠路

蒲江町は大分県の最も南の地。日向灘に面し、豊後水道の入り口にあたる暖かいところ。黒潮の光り輝く明るい町である。江戸時代、町域は入津浦と蒲江浦にわかれ、米水津浦とともに佐伯藩の浦支配のなかで下浦に属していた。下浦に陸路から入るには、いずれも峠を越さねばならなかった。しかし、その道はどこもけわしく、人々は苦勞したものである。

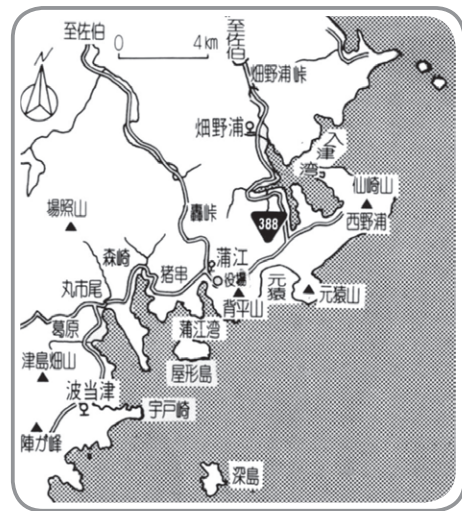
佐伯から米水津村に通ずる浦代峠は同村の項でふれたが、蒲江浦へ轟峠が本格的に開かれたのは一足早い明治22～24（1889～1891）年。一方、入津の畑野浦へのトンネルが通じたのは大正に入って1年のことだった。昭和になると31（1956）年に轟峠が改修されてトンネルが掘られ、畑野浦峠も52（1977）年に頂上部に新トンネルが開通、58（1983）年に佐伯側の整備も終わって面目を一新した。そしていま再び、轟峠のより低いところに新トンネルが計画されている。

■海上交通の要地

陸路は不便だったが、海路はもちろん早くから開

けていた。なにしろ町域は総延長90キロといわれる海岸が複雑な出入りを見せ、この間に入津、蒲江両湾はじめ、合計12もの入り江があつて良港を形成している。古くは佐伯氏の旗下にあつた海部衆の一翼をになう水軍の地だったし、さらに明船が豊後水道に入る場合の経由港でもあつた。そうした海上交通の要衝だけに、江戸時代の佐伯藩では蒲江浦、西野浦、波当津浦に遠見番所、蒲江浦に浦手番所などを置いて海上警備の任にあたらせている。

番所がびっくりしたのは、嘉永5（1852）年3月、猪串浦に清の船が漂着したさいであろう。報告を受けた藩ではすぐに重臣会議を開いて検討した結果、重大事件として幕府に報告、事情調査して長崎に送った。その調査役人は異国船に威容を見せるため、槍、弓矢のほか持筒、鉄砲の



<メモ> 周囲にある名所旧跡等

◇佐伯駅から木立、畑野浦峠経由で畑野浦まで19キロ。同じく青山、轟峠経由で蒲江まで28キロ。畑野浦～蒲江間13キロ。

◇蒲江から波当津まで20キロ。屋形島へは蒲江から定期船4便、深島へは同じく2便。海中公園グラスボートは不定期で、申し込みにより運航。

行列を組んだという。当時の情勢と藩のあわてぶりが目に見えるようだ。

■盛んな水産業

主産業は当然ながら漁業である。江戸期には他町村と同様、ここもイワシ漁が中心となり、干鰯が主体だった。漁場は沿岸一帯だが、なかでも日向境の宇戸（宇土）崎から深島にかけてが最高の漁場だった。ただ、境界海面であるため日向漁民との間でたびたび争いが起き、藩では深島に監視船を常駐させたという。

これは明治になってからも続いたようで、同 18（1885）年、政府によって正式に県境が定められ、同 35（1902）年には漁業権について一応の合意も成立した。だが、大正 6（1917）年になって紛争が再発、乱闘事件となった。「宇土崎沖の大海戦」といい、いまに語り草となっている。戦後は沿岸漁業の不振から漁業の体質改善が課題となり、登場したのが真珠の養殖だった。大正 10（1921）年に試みられ失敗しているが、昭和 27（1952）年に畑野浦で実施されてからあっという間に普及、40 年前

後は「真珠の町」とまでいわれた。しかし、これもやがて先細りとなり、いまでは代わってハマチなどの養殖が盛んになった。

■屋形島と深島

蒲江町で忘れていけないのは屋形島と深島である。屋形島は寄港した外国人船乗りたちを滞在させる館が置かれていたともいう。元禄 7（1694）年に開拓が始まり、一時は藩の牧場として馬が育てられたこともある。海底にテーブル・サンゴが見られ、いまでは蒲江海中公園としてグラスボートが蒲江港から出る。

大分県最南端の深島は、享保 6（1721）年に赤木村（現在の直川村赤木）の農家 4 戸が移住、開発したのに始まる。その後、同じ赤木の 15 人が年貢米未納で、さらに佐伯藩内の文化一揆の指導者 6 人が島に流され「流人の島」といわれるようになる。同島の初期の開拓者は、こうした人々だった。このほか町内には元猿・高山海岸などの自然美、海中から出た東光寺の薬師如来、県文化財の蒲江神楽や漁具（資料館）など文化遺産もあり、波当津は将来、日豊海岸国定公園の集団施設地区として脚光を浴びそうだ。

⑩5 バス路線 (29) 尺間登山口・畑木

佐伯氏の本拠だった地



◀ 厚肉の堂々たる磨崖石塔

■みごとな磨崖石塔

弥生町という名は、明治、上野、切畑三村の合併で採用した新しいものだが、町域は南海部地方では最も早い段階に開かれた地域で、佐伯市より歴史は古いともいえるのである。

というのは、この一帯が豊後大神氏の一族、佐伯氏の本拠地だったと考えられるからである。大神氏についてはこれまでたびたび述べてきたが、この一帯は 11 世紀ごろから佐伯氏が実質的な支配者として君臨したようで、大友氏が豊後に入ってから次第にその傘下に組み込まれていった。

佐伯氏の力的一端を物語るのが、上小倉にある県史跡の小倉磨崖石塔群である。

雨竜山と呼ばれる丘の崖に、宝塔八基、五輪塔三十四基が刻まれている。

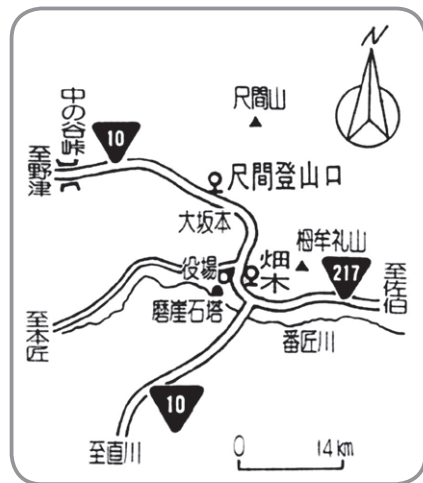
一部はかなり磨滅しているが、厚肉の堂々たるもので、銘文によって嘉暦年間から康永年間（1326～45 年）にかけてのもので、大神惟武などによって建立されたことがわかる。このほかにも、あちこちに南北朝時代の銘をもつ石塔、板碑が散在している。

■梶牟礼城の合戦

戦国期に入ると、佐伯氏は梶牟礼（とがむれ）城に拠った。番匠川に井崎川、床木川が合流する地点に近く、町域全体ははじめ番匠川下流域を見おろすことのできる梶牟礼山（223 メートル）の山頂を中心としたもので、築城の時期は明応～永正年間（1492～1521 年）と推定されている。

ここを本拠として、佐伯氏は大きく力をたくわえ、大友氏の下において国衆の有力者として成長した。ところが、そこで悲劇が起こる。謀反の疑いをかけられたのである。

大永 7（1527）年のことで、当主は佐伯惟治。肥後の菊池氏、筑後の星野氏らと手を結び、国主の大友義鑑に反意を抱いたというのである。義鑑は直ちに臼杵氏らを送って城を攻めさせ、惟治は日向に落ちのびる途中に殺された。これを梶牟礼合戦という。惟治の霊は県南地方のあちこちに



<メモ> 周囲にある名所旧跡等

◇佐伯駅から畑木（磨崖石塔など）まで 8.5 キロ、尺間登山口まで 13 キロ。大分市中心街から登山口まで西 8 キロ。（犬飼町久原から 24 キロ）畑木まで 52.5 キロ（同じく 28.5 キロ）。登山口から尺間山頂まで 4 キロ。九合目あたりまで車道。

祭られ、悲劇はいまに語りつがれる。謀反は無実で、おそらく急成長する佐伯氏をつぶすのが大友氏の真の狙いだったと思われる。

■尺間山の創祀

これによって佐伯氏の本流は絶えたが、庶家の惟常が佐伯氏を継ぐことになる。その子惟教の代には再び国衆の第一人者となったが、大友家臣団の内輪もめで一時は四国に渡ったともいう。しかし間もなく帰城した。佐伯氏の最後は惟定で、天正の島津軍豊後侵入のさいは有名な堅田合戦でこれを撃退している。だが、やがて大友氏の除国とともに佐伯を離れ、のちに宇和島で藤堂高虎に仕えたという。

天正元（1573）年には、信仰の山として著名な尺間山が開かれた。ふもとの大坂本出身の修験僧、高司盛雲が大和の大峯山で修行ののち、神告によってこの地に霊場を開いたと伝える。山岳密教をもとにした愛宕神を中心とする神社で、魔を釈（と）く意で釈魔とも書く。標高 641 メートルの山頂に尺間神社があり、境内に長い石段が続く。ながめもすばらしい。またふもとは本宮霊峰尺間大社がある。

愛宕社の風流杖踊りは県の無形民俗文化財。

■改修された峠

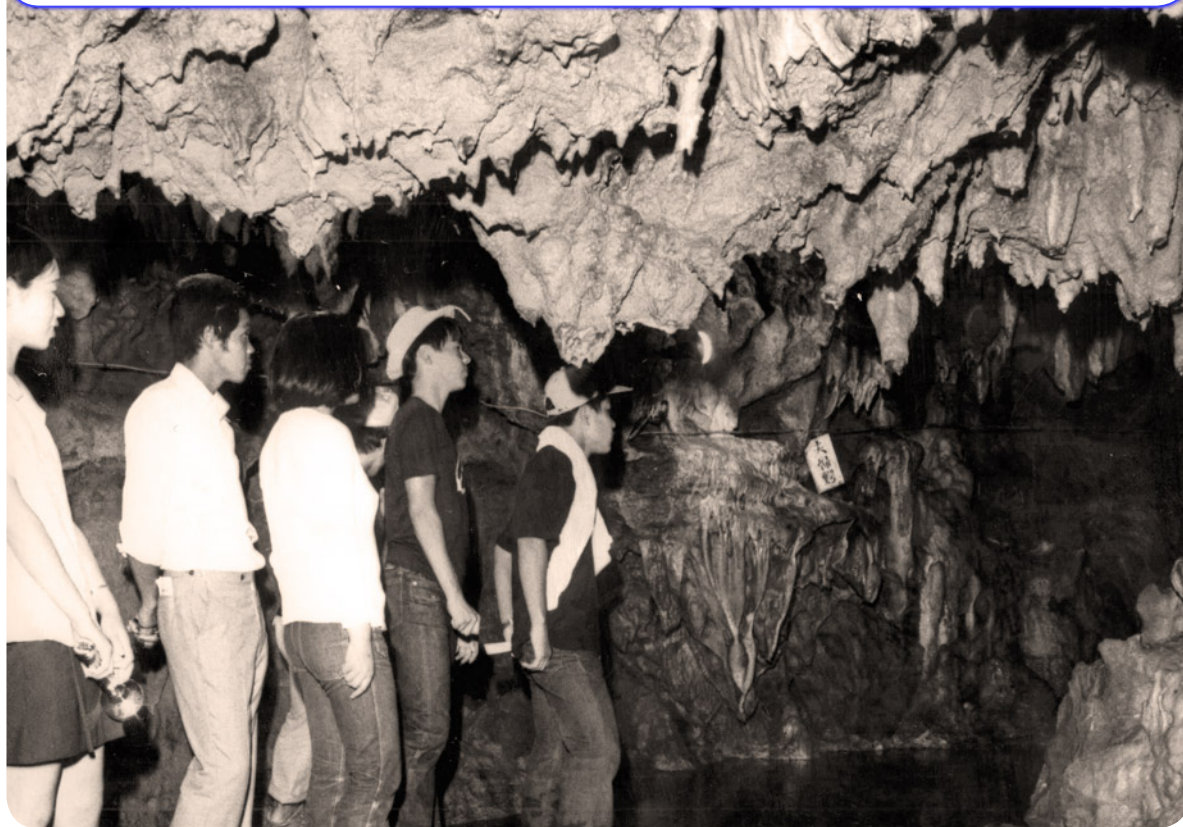
弥生町は古来、県南部の海岸部と山間部、さらに大野川流域部とを結ぶ要地で、佐伯氏がここを本拠としたのも、地の利によるところが大きい。その重要さは現在も変わらない。町中心部を国道 10 号線が走り、同 217 号線を分岐させる。駅こそ置かれてはいないが、日豊本線も町内を抜けている。

ただ、大野川流域とをつなぐ 10 号線の中の谷峠は、かつて大変な難路だった。明治 30（1897）年に車馬の通れる道となったが、それでも地元の人々が「泣かん谷（中ん谷）こそ泣く谷よ」というほど。なにしろ 10 号線は東九州の幹線道。その動脈栓塞（せんそく）を取り除かねばということで、昭和 36～38（1961～63）年にかけて三つのトンネルと九つの橋による新道をつくった。

なお、最近の弥生町は佐伯市とのつながりをますます深めている。一部にベッドタウン化の様相も見られ、人口も増加しているが、今後、山間部をいかに活性化するかが課題となっている。

(106) バス路線 (30) 波寄・小半鍾乳洞

洞窟に旧石器の遺跡



◀ 県の4大洞の1つ、小半鍾乳洞

■きりたつ山と谷

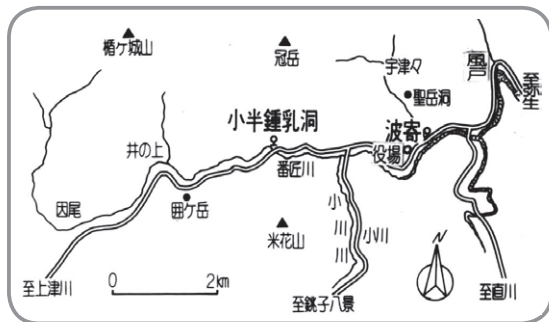
番匠川の中、上流域を占めるのが本匠村である。昭和 30（1955）年に中流の中野村と上流の因尾村が合併して新しい村となったとき、番匠の本源に位置するの意で本匠の名を採用した。本支流に沿って小さな平地がところどころにあり、そこに小集落が散在している。あとはほとんどが山地。山林面積が 95%に達しており、耕地は 2%に満たない。

特に北側に連なって大野郡との境になる山々には、冠岳、楯ヶ城山、石峠山、佩楯山など 600 ～ 700 メートル級のピークが多く、主として石灰岩からなっている。これが大分県南部を斜走する古生代の地層の帯で、九州山地につながって行く小山脈である。一方、南の方には米花山、酒利岳など同じく 600 ～ 700 メートルの山があり、北部、南部とも谷が深く切れ込んでいる。ここにみごとな自然景観が生まれる。山は緑濃く、谷はきりたち、水は地質のせいもあって濁ることは少なく透明である。

■峡谷美と鍾乳洞

峡谷美はいたるところに見られ、なかでも銚子八

◀メモ> 周囲にある名所旧跡等
◇佐伯駅から弥生町畑木経由で
風戸まで13キロ、波寄15.5キ
ロ、小川入り口18キロ(銚子
八景までさらに7キロ) 小半鍾
乳洞19.5キロ、井の上22.5キ
ロ。このほかバスは通っていな
いが、直見駅から入る道もある。
聖岳洞窟、囲ヶ岳洞窟はいまの
ところ入洞不能。



景が知られる。支流の小川（おご）川の上流にある奇岩と清流の地で、昇竜滝、雄淵、雌淵、巴淵、猛虎淵、竜頭岩、平氏滝、鮒子滝が八景。これに紅葉がからまる。

このほか、地獄谷と呼ばれる風戸の峡谷景観などもあるが、特色は石灰岩地帯だけに、いたるところに洞穴があること。

なかでも小半鍾乳洞は国指定の天然記念物で、風連、狩生、稲積とともに大分県の四大洞といわれる。全長 700 メートル近い洞が発見されたのは明治 32 (1899) 年。前年に洞の前の番匠川に橋がかけられたのが発見のきっかけだったともいう。いま本匠村

最大の観光資源となっているが、洞にあまり手を加えず、自然のままの姿がよく残っているのがいい。

このほか天然記念物では因尾地区井の上の宿善寺にナギの木がある。佐伯藩主の毛利高政が朝鮮の役のさいに持ち返った三本のうちの一本といい、他の二本は佐伯市の互所明神と弥生町の道明寺のものと伝えている。

■聖岳と圀ヶ岳の洞窟

ところで、先述した数多くの石灰岩洞窟は先史時代の人たちにとって格好の住居として利用された。その一つが波寄の近く、宇津々の山の中腹にある聖岳洞窟である。

遺跡が発見されたのは昭和 37 (1962) 年のこと。全長 45 メートルのさして広くない細長い洞で、なかには三層の土の堆積があり、調査の結果、最も下の層から旧石器時代終期のものと思われる石器が見つかった。だが、それだけではなかった。同時に大人の頭骨の一部が出土したのである。頭骨片は厚さ 1.3 センチほどで、わずかのものではあったが、これが日本で初めての旧石器を伴う人骨の発見だった。有名な北

京周口店山頂洞人のものによく似ているという。

そして 58 年夏、今度は井の上の圀ヶ岳洞窟から全国にショッキングなニュースが流れた。旧石器人の描いた壁画が発見されたという騒ぎだった。それはともかく圀ヶ岳洞で先史人が生活したことは確か。それにしても、今後なにが発見されるか。一帯の洞穴群はナゾをはらんで興味は尽きない。

■山に生きる村

山がちなところだけに、過去も現在も産業は山と結びついている。江戸時代から山林業が盛んで、木炭については因尾に藩営のかまも築かれた。シイタケも佐伯藩内では因尾で栽培されたのが最初といわれ、製紙も奨励されている。現在も素材やシイタケの生産は盛んで、さらに因尾茶も名物となっている。加えて最近では、山谷の自然景観や番匠川での釣りなどを生かした観光開発も考えられている。

問題はやはり過疎化に伴う林業労働力の不足や、交通事情の悪さ。明治時代に開設された川沿いの県道は少しずつ改修されてはいるが、国道などの幹線がないだけに、まだまだ不便なところが多い。 **N**

デジタルブック版

「ふるさとの駅＝各駅停車・大分県歴史散歩＝」（22）

2007 年 7 月 27 日初版発行

筆者 梅木 秀徳

編集 大分合同新聞社

制作 別府大学メディア教育・研究センター

発行 N A N－N A N事務局

〒 870-8605 大分市府内町 3-9-15

大分合同新聞社総合企画部内

このデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたウェブプロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環として作成・無料公開しているものです。デジタルブックは、ほかにも多数。ネットに接続して上記ボタンを押し、「NAN-NAN」のサイトをご利用下さい。